

# 研修だより

矢島小学校

3

04.4.23

## 「習熟度別指導」は差別？

ちょっと難しい理論が続いてしまいました。今号はもう少し具体的な内容にしたいと思います。

「個に応じた指導」体制の例として、現在の3つがあります。

1. 習熟度別学習 = 学習の理解度や習熟の程度に応じて編成
2. 課題選択学習 = 複数の課題から選択させ、同じ課題の子供同士で編成
3. 学習方法別学習 = 図書で調べる、PCで調べるなど学習方法の違いで編成

今号では「習熟度別学習」を取り上げます。習熟度別編成というと、かつての「能力別編成」と混同して、子供を差別化する等の誤解がありますが、そうではないと考えます。算数を例にとると、具体的には、次のような違いがあります。

基礎コース	復習から始め、教科書の内容の理解を目指す。意味はあまり問わない。 (できることを保証してから意味の理解へと向かうべき。)
標準コース	教科書の内容の理解に重点を置く。その上で、補充的な問題か、発展的な問題かを選択させる。
発展コース	教科書の内容をこなしてから、時間があったら発展的な内容をやる。

< 『学校運営研究』(明治図書)2004.2月号:志水廣論文 >

基礎コース	教科書の問題をスモールステップで与えたり、数値を簡単にしたりしてから、一般化を図る。
標準コース	教科書の挿絵や図を手がかりに問題場面を十分に捉えさせ、自力解決させる。
発展コース	教科書の問題を条件不足にしたり、視点を広げたりして多様な考えを引き出す。

< 『学校運営研究』(明治図書)2003.5月号:鈴木正則論文 >

まとめると、次のようになります。

習熟度別学習とは、子供が、教材や指導過程(子供にとっては学習方法)が異なった集団に分かれて学ぶ指導体制である。

習熟度別学習は個に応じた指導の一つとして指導効果が大いに期待できる指導体制なのです。配慮事項として、

- ・ 実態調査等のテスト結果で、機械的に分けることのないようにする。
- ・ 子供が自分でコース選択できるようにし、単元終了時にそのコースが適切だったか自己評価させる。

などを実行することで、差別感をもたせないようにすることは十分可能と考えます。

(その際は、保護者や子供に対する十分な説明が必要なことは言うまでもありません。)